市民病院 ハナちゃん通信

問 市民病院管理課
☎(48)5050

眼科の専門技師 視能訓練士の仕事

人間は80％の情報を眼から得ていると言われています。

人間の眼は、精密機械の様に２㎝ちょっとのボールのなかに、神経など様々な器官が詰め込まれています。そのため、目の調子が悪くなった場合、診断・治療に多くの検査が必要となります。

検査には専門の技術と知識が必要となり、その検査を行う専門技師が、国家資格を取得した視能訓練士です。

眼科を受診した場合に多くの人が経験する、視力検査、眼圧検査（眼の圧力、硬さの検査）、屈折検査（近視、遠視、乱視の有無）、視野検査（見える広さの検査）などがその代表的な物です。時には眼鏡の相談や、眼鏡処方の検査もします。

通常眼鏡を作る場合は、眼鏡店に行けば良いのですが、白内障などの病気で眼が見えにくい場合、眼鏡店では作ることが出来ません。そのため、視能訓練士が病気を考慮しながら最良の度数で眼鏡を作る手助けを行います。

また子供の斜視、弱視の検査、治療なども行い、白内障など正確な手術をするための検査も行っています。

眼科に受診してわからないことや、不安なことがあれば一度気軽に相談してみてください。何かお手伝いが出来るかもしれません。

広報へきなん令和元年12月15日号のハナちゃん通信でお知らせしました「ハナちゃんフェスティバル」の開催日を５月23日㈯から31日㈰に変更しました。

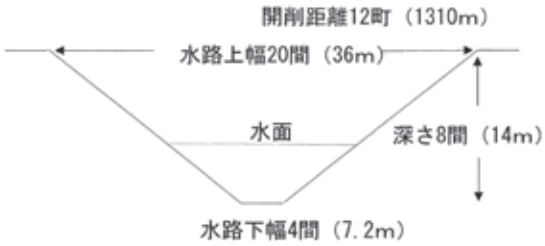
碧南の歴史へのいざない

問 文化財課内市史資料調査室
☎(41)4566

No.70　矢作新川の開さく(2)

前回紹介した1605年の矢作新川開さくは、矢作川の洪水を防ぐ目的であったとする説が一般的です。しかし、異説がいくつかあります。その１つが三河屈指の湊（みなと）である大浜湊と矢作川上流の岡崎城下を水運で結び川舟で運ぶという説です。「塩の道」とも呼ばれるこのルートは川舟が足助まで上り、その後は馬の背に荷物をのせて奥三河、信州へと運ばれていきました。この道は物流の大動脈でした。

このほかに矢作橋を洪水から守るという説もあります。東海道にかかる矢作橋は日本一長く、立派な橋でした。下流の大郷山（現在の西尾東高校付近）と浅井山（矢作古川をはさんだ対岸）の間は狭く、その後は海まで３里（12㎞）もあって、ここの水はけを良くするには膨大な費用がかかってしまうので、代わりに藤井村から米津村までの開さくなら、わずか12町（1.3㎞）で海につながるため安く済むという説です。

いずれにしても1605年夏に堀川ができ上がり水が流れ始めました。でき上がった堀川は、実は幅広く掘られたわけではありませんでした。断面図のように水路の上幅は20間（36m）、深さ８間（14m）、川底幅４間（7.2m）という小規模なもので、単なる分流が目的だったようです。ところが一旦水が流れ始めると、鷲塚方面の入り江と落差があったため、流水は驚くほど速かったといいます。『明治村史』によれば、堀川両岸が浸食されはじめ、米津村では、56石ほどの田畑を失ったとあります。藤井村では部落が両岸にあったため、70軒ほどあった戸数が数年で25軒になり、中には屋敷がなくなって発狂した者もいたそうです。その後も浸食はやまず、江戸時代中ごろには、藤井村で川幅120間（216m）にもなりました。この両村は川岸を守るため竹を植えたとあり、今日でも川岸には竹やぶを見ることができます。

●開削推測断面図